

パブリック・スピーカーとしての教師－語りの力

Teachers as Public Speakers: Power of Narratives

野村 和宏*

NOMURA Kazuhiro

English Abstract : A teacher who stands in front of students and conducts lessons can be considered a public speaker, regardless of school type or subject. In an English class, language activities may include the teacher's opening talk, classroom English, and reading aloud from a textbook. In terms of styles of speech, these can be categorized into four styles: impromptu, manuscript, memorized, and extemporaneous. By fully understanding and being aware of the advantages and disadvantages of each style, teachers can make their teaching more meaningful. The author teaches students who try to become English teachers, and the students practice micro teaching. Although they spend a lot of time preparing teaching plans and materials for the class, it is not easy to actually stand in front of other students and conduct the lesson effectively with confidence. Watching a video of their own teaching and reflecting on it is an important step in establishing a reflective self through an objective, third-party perspective. In this paper, how students understand the meaning of such learning process will be discussed.

Key words : Public Speaker, Public Speech, Speech Styles, Video Observation, Reflection, Power of Narratives

日本語要旨 : 学習者の前に立って授業を行う教師は、校種や教科に関わらずパブリック・スピーカーといえる。英語科の授業では、教師によるオープニングトーク、クラスルームイングリッシュ、教科書の音読などの言語活動が考えられる。これらはスピーチのスタイルの観点から、impromptu、manuscript、memorized、extemporaneousの4つのスタイルに当てはめることができる。それぞれのスタイルの長所と短所を十分に理解し、意識することで授業はより密度の濃いものとなる。筆者は教職課程で教員をめざす学生の指導を行っており、学生は模擬授業を実践する。時間をかけて指導案や教材を準備し模擬授業に臨むが、実際に他の学生の前に立って授業を行うことは簡単なことではない。模擬授業に対する複数のふり返りの中で自分の授業の動画映像をじっくりと観察することは、客観的な第三者的視点を通してReflective Selfを確立していくための重要なステップとなる。本稿では学生がこうした学びのプロセスの意味を理解し、どのような気づきをしているかを論じる。

キーワード : パブリック・スピーカー、パブリック・スピーチ、スピーチのスタイル、映像観察、ふり返り、語りの力

* 甲南大学 全学共通教育センター教授 (College English、中級英語Presentation、中級英語Pronunciation、英語科教育法、教職実践演習、教育実習 担当)

1. はじめに

2019年にCOVID-19の最初の症例が出て以降、2020年はこの新型コロナウイルス感染症が世界的規模で拡大した。感染防止の観点から人と人との接触を避けるため、従来は当たり前のように同じ空間において対面で行われていた会議や授業などがオンライン上で代替されるようになり、ビジネスや教育分野での対人コミュニケーションのあり方に大きな変化がもたらされた。

学校の授業を考えると、学生が実際に教室に集まって行われる従来の対面授業に加え、Zoomに代表されるオンライン会議用のアプリケーションを介してパソコン等の画面上で行われるオンライン授業、教室の学生とオンライン参加学生をリアルタイムで結んで行うハイブリッド授業などが試行された。このことにより、パンデミックによる影響を最小限に抑え、教育を止めることなく進めることのできる新しい可能性がもたらされた。一方、それぞれの教育方法には利点に加え、当然ながら問題点や解決すべき課題も浮かび上がってきた。こうした授業形態への対応については、野村(2022)²で実践に基づいて論じた。

直接、学習者の前に立ち授業を行う場合であっても、パソコンのカメラに向かって行うオンライン授業であっても、教師の行う行為には必然的に学習者に対して話すということが存在する。この行為はまさに「パブリック・スピーキング」に他ならない。つまり小学校、中学校、高等学校、大学など校種に関わりなく、また教科や学習者の人数に関わらず、人前に立って話す教師はパブリック・スピーカーなのである。教師をパブリック・スピーカーの視点で捉えた場合、情報やメッセージを相手に伝えるという行為において、どのよう

な要素が存在するのか、また優れたパブリック・スピーカーとはどのような特徴や資質³を備えているか、そして将来、教職に就くことをめざす学生がより良いパブリック・スピーカーとしての教師となるために、どのような学びの過程を経て課題を克服していけばよいか。本稿はこのような観点で論じる。

2. 授業で話すという言語活動

教師が授業の中で声を出して話す活動には、どのようなタイプがあるのだろうか。教科によって授業の性質が異なるため、ここでは英語科の授業で英語を発する場面で考えてみる。大きく分けて、(1)オープニングトーク、クラスルームイングリッシュ等の会話的発話、(2)教科書の模範朗読、(3)準備した内容によるスピーチあるいはプレゼンテーション、などがあげられる。

まず(1)のオープニングトーク、クラスルームイングリッシュといった会話的発話であるが、これは英語という科目の特性を考えた場合に、授業の雰囲気作りをする上で重要なものとなる。教師がすぐに日本語で教科書の説明に入るのではなく、英語による挨拶、その時々話題についてのショートトークなど、教室が英語という言語の音で満たされるという状況を生み出すことが大切である。文部科学省の学習指導要領は、平成21(2009)年の高等学校外国語科の改訂の際に「英語に関する学科の各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とすること。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮すること」とした。『学習指導要領解説』⁴に

² 学生の意欲を高める対面、オンライン、ハイブリッド授業 — What, How, and Why. 甲南大学国際言語文化センター紀要『言語と文化』2022年 第26号 pp.19-38.

³ Hill & Dobbryn(1979:12)が “For many trainees it is a great strain just to have stood up for the first time in front of a class.” と述べているように教師として生徒の前に立つということは緊張するものである。Qubein(1996: 5)はパブリック・スピーチの能力を「もはや身につけているのが望ましいというものではなく(no longer ‘nice-to-have’ skills)、必須のもの(essential)である」と述べている。特に政治家を始めとするリーダーには優れたスピーチ力が期待されるが、佐々木(2011)は日本の政治家について「今、国民を心から納得させ得る政治家がいない。なぜか。簡単です。演説が、文章が、ヘタだからです。演説する術を古代ギリシャではレトリケーと言いました。(中略)堂々たる雄弁によって精密に根拠を示し、民衆の納得と同意を獲得する芸芸。われわれが失っているのは、この真の意味でのレトリケーなのです。」と指摘し、雄弁の芸芸の必要性を説いている。

よれば「授業は英語で行うこと」が意味するのは、教師が授業で英語を用いることにより、生徒が英語を英語のまま理解したり表現したりすることに慣れるような指導の充実を図ることなのである。

この「英語の授業を英語で行う」という表現が追加された当初、「英語の先生は本当に英語で授業ができるのか」といった議論⁵さえもあった。当然のことながら、単に教師が流暢に英語を話せることを生徒に見せるためのものではない。同時に、英語の授業の中で日本語を一切使用してはいけない、ということでもない。授業の中で、とりわけ教師から生徒に向けて発せられる活動の指示としての英語表現⁶は何度も繰り返されるものである。これは言葉を本来のHere and Now、つまりその場でまさにその瞬間に使われている本物の言語使用といえるものであるため、忍耐強く使い続けることで生徒の中にも定着させていきたい。“Open your textbook at (to) page 15, please.”とか、“Make groups of four members.”とか、“Share your idea with your partner.”などいくらかでも考えられる。さらにプリント資料等を配布する際に、無言で行うのではなく、まずは教師から最前列の生徒へ“Here you are.”と渡し、生徒は“Thank you.”と返す。さらにその生徒が次の生徒に対して同じことを繰り返しながら、後ろへと送っていくことで、恥ずかしがらずに安心して英語を口にすることができるようになる。このように授業中のあらゆる場面を活用して、自然な発話を実践することは可能であり、こうした表現を日本語でなく英語で行うことで授業全体の質が下がるものではない⁷。

続いて(2)の教科書の模範朗読を考える。朗読はあらかじめ準備された素材を声に出して再現する

というもので、いわゆる音読である。この言語活動は英語では、Oral Interpretation、Interpretive Reading、Recitationなどと呼ばれることもある。英語の教育的活動として行われるコンテストの中にも、「レシテーション・コンテスト」と呼ばれるものがあり、ここでは課題文をどのように音声表現して聴衆に伝えるかが競われる。「暗唱コンテスト」という呼び方もあるが、その場合、暗記するという行為に焦点があたりすぎて、作品の内容を伝えるという本来の意味が誤解されるおそれがある。この朗読という発話行為は声を出す話者とその素材を書いた人物が別である。他の例をあげれば、作曲家が書いた作品を音楽家が演奏することに似ている。例えば、モーツァルトが作曲した曲をさまざまな演奏家が独自の解釈を施し、演奏して聴衆に届けるようなものである。ここには作品に向き合い、自らの解釈によって聴衆に伝える表現者の姿がある。前述の英語名称にinterpretationとかinterpretiveという言葉が入っている意味がここでわかる。演奏家の数だけ異なる音楽が生まれるように、朗読を行う人の数だけ異なる音声表現が生まれるのである。その意味で、教師が教科書を学習者に読み聞かせる場合には、十分な準備をして英文の伝えるべきメッセージを余すところなく表現するように心がけたい。

こうした教科書の音読、朗読では、伝えるメッセージを十分に理解すること、文構造を理解すること、言葉の情報量によって強弱をつけ自然なリズムの中で話すこと、冒頭部分は聴き手を惑わせないように丁寧に導入すること、などを意識したい。教師が生徒の方を見ずに教科書にかぶりつきで声を出している間は、まだ十分にメッセージが伝わらない。その日の授業分を覚えてしまうくら

⁴ 『文部科学省高等学校学習指導要領解説外国語編英語編』平成21年12月 p.73 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_jcsFiles/afiedfile/2010/01/29/1282000_9.pdf

⁵ 新聞などでも「英語で授業できるの?」と見出しをつけ「English Only 日本語厳禁」と黒板に書いて「さあ、英語で話そう」と声をかける先生に対して「先生、大丈夫?」と心配そうな生徒のイラストを載せた記事などもあった。(『朝日新聞』 耕論 2009年2月1日)

⁶ これは英語教授法のTotal Physical Response (TPR)の応用と考えることもできる。

⁷ 教室英語に関する参考書もいろいろと入手できるが、吉田研作、金子朝子監修による『現場で使える教室英語—重要表現から授業への展開まで』と『科目別 現場で使える教室英語—新しい英語科目での展開』(三修社)は特に内容の充実したものである。

い練習を行い、確信をもって授業に臨みたいものである。

また(3)の準備したスピーチやプレゼンテーションは、生徒が行う言語活動の観点からは、教科書で一定の内容を学んだ後、それに対する自らの考えをまとめて短いスピーチを発表したり、小さなポスターを作成してプレゼンテーションを行ったりするといった活動である。こうした発展的活動を取り入れることで、生徒は自ら実際に表現するという経験を通して学びをより強固なものにしていくことができる。指導する教師も自らがスピーチやプレゼンテーションの見本を見せることで生徒を導きたい。そうした観点でもパブリック・スピーカーとしての教師の存在は大きい。教職課程で学ぶ学生が教科教育法の授業の中で模擬授業を行う、あるいは教育実習に行き授業を行うといった場合、最初から納得のいく授業はできるものではないが、何をどう練習すればよいか、こうしたことを意識しながら学ぶことで、確実に成長していくことが可能である。

3. パブリック・スピーチのスタイル

パブリック・スピーチという言語行為をその発表形式から分類する際、Lucas (2007, 2020)、Miculka (1999)、Zarefsky (2014)、Zeremba (2012)を始めとする専門書では大きく4つのスタイルに分けて論じることが多い。それらは(1) impromptu、(2) manuscript、(3) memorized、(4) extemporaneousである。

まず(1)のimpromptu speechは準備や練習をせずに即興で行うスピーチである。「即興」という観点では会話もimpromptuであるが、会話とimpromptu speechの違いといえば、会話は少人数の参加者により発話者が自由に交替しながら進む

のに対し、impromptu speechはあくまでスピーチであることから、一人の話し手が決まったテーマについて複数の聴衆に一定時間話しかけるといった違いがある。即興で話すため準備が不要、自然な発話が期待できる、短い時間でまとめる訓練となる一方、構成や展開が練られていない、発言の間違いが生じやすい、文法や語彙に誤りが生じやすいといった欠点がある。政治家などがうっかり犯してしまう失言は主にこのimpromptu speechであることが多い。スピーチやプレゼンの授業の中で発表能力を養うための練習方法として、この即席スピーチを取り上げることも多いが、授業を行う教師の立場で考えれば、授業の中で生徒から予期しない質問があり、その場ですぐに答える場合などが当てはまる。

次に(2)のmanuscript speechは用意した原稿を読むことにより発表するスタイルで、会合や式典での挨拶など、正式でフォーマルな場でのスピーチに多く用いられる。誤りが許されないような政治家のスピーチも注意深く準備された原稿を読むというこのスタイルが多い。しかし、ただ原稿に目を落として「読む」だけでは聴衆に伝わらない。政治の世界における演説の復権について論じた岩見 (1981: 313-316) によると、聴衆は「聞こうとしない集団」なのではなく、演説の質によっては、いつでも「聞く集団」になりうるとし、借りものでない「自分の論旨」を、ごまかしなく「きちんと」、無理に権威づけることなく「平明に」、熱意と工夫を持って「語りかける」ことが求められていると述べている。少しでも聴衆に向かって話しかけているという印象を与えるために、発表する原稿を中空に映し出すプロンプター⁸と呼ばれる透明なパネルを用いて顔を上げて話す場合や、プロンプターを使わずにRead - Look-up - Present

⁸ 政治家は大事な場面で聴衆に語りかけるためにプロンプターを使う。初の米国女性副大統領となったハリス氏はプロンプターの存在を意識させない自然な語り口が見事であった。オバマ大統領はノーベル平和賞受賞につながったプラハでの核なき世界演説でプロンプターを使ったが、広島を訪れて演説を行った際はプロンプターを使わず、手元の演台の上に原稿を置き、目の前の式典参加者にアイコンタクトもしながら丁寧に語りかけ、言葉の重みが伝わる演説となった。

という手法⁹でアイコンタクトを意識して話す場合もある。その一方で、原稿を読み続けて平板な語りに終始してしまっている¹⁰ことも多い。

続いて(3)のmemorized speechは完全に原稿を覚えて発表するものである。前提としてmanuscriptを用意するため、manuscriptスピーチの発展形¹¹ともいえる。練習を重ね完璧に自分のものにして自信を持ち、聴衆に存在感を示すことができる一方、ひとたび記憶があやふやになると不安になったり発表が行き詰まったり¹²自然な流れで話すことができなくなる。スピーチコンテストに出場する場合に限らず、舞台上俳優が自らの役を演じることもある意味でmemorized speechの発表と考えられるが、実社会の中では完璧に覚えて口頭発表するという機会は実はそれほど多くあるわけではなく、たとえ覚える場合でも全体のうちの冒頭と最後だけといった状況が一般的である。原稿を持たずに話す姿から、内容を完全に自分のものにしていてという印象を聴衆に与えることができる。その一方で、聴衆の反応に関係なく、覚えたとおりの一字一句そのままに声に出すこと自体が目的となってしまうと、柔軟性に欠

ける印象¹³を与えることになる。

(4)のextemporaneous speechは“done or said without preparation”と定義している辞書¹⁴も多いが、スピーチのスタイルを表す語彙として用いる場合は“carefully prepared but delivered without notes or text”のように¹⁵「十分に準備を行った上で最小限のメモやノートを見ながら即興性を持って発表するスタイル」という意味である。近江(1996:298)は「準備して暗記した部分、読み上げる部分、即興の部分が混在したスタイルで、その場の状況に対応しつつ語るという本来のコミュニケーションのモードを残したスピーチ」と長い説明的な定義を与えているように短い確かな訳語を与えにくいスタイルである。聴衆の反応に合わせて内容を加減するなど柔軟な対応をしながら進めるという点で、近江の指摘するように本来のコミュニケーションにみられる柔軟なスタイルで、このextemporaneous speechの良さを体现できるような発表をすることはなかなか難しい。しかしMiculka(1999:241)が“If your goal is to speak to your listeners in a warm, relaxed manner, yet provide well-reasoned, persuasive strategies

⁹ このRead - Look-up - Presentは、先に原稿に目を落とし、次に発話する部分を把握して記憶に留め、顔を上げてその部分を話し、話し終えるタイミングで再度、目を落として続く部分を同様に把握し、再び顔を上げて話すという方法である。アメリカ大統領やイギリス首相を始めとする政治のリーダーは、プロンプターを使わない場でもこの手法で聴衆にアイコンタクトをしながら語りかけている。一方、多くの日本の指導者は下を向いて原稿を読み続け、最後だけようやく顔を上げるというケースが多く見られる。アイコンタクトの仕方では聴衆に与える印象が大きく異なってくるため、日本の教育の中で、小さい頃から訓練して身につけさせていきたい力である。

¹⁰ 渋谷(2011)は「政治家が官僚が書いた答弁を棒読みするような生気のない言葉とは対極にある、生々しい、体温が伝わってくる言葉」を「肉体的な言葉」と称し、そのような言葉が求められているとする。橋爪(2020:134)は「プロンプターを使うかどうかはどうでもよい。つまり、使っても使わなくてもよい。のではあるが、つぎの鉄則がある。原稿をただ読んだのでは、スピーチは伝わらない。読むとは原稿に縛られていること、そこに、語る主体がいまいちということである。語り手がいまいちであるから、聴き手もいまいち。だからそもそも、スピーチとして成立しない。」とさえ記している。

¹¹ Zaremba(2012:101-102)は“A memorized talk is a manuscript presentation that has been committed to memory. (...) In order for the format to be so classified, the talk would have to be memorized word for word and delivered word for word.”とあるように、例えばスピーチコンテストでの発表や演劇のセリフを覚えて発表する場合などが考えられる。

¹² 筆者は中学2年生の時に校内英語暗唱コンテストに参加した。講堂で同学年生徒や先生方総勢450人を前にした本番の大舞台上、完璧に覚えたと思っていた課題文が、途中で突然、記憶から消え去った。こうした経験からもmemorized speechを行う場合は、発表の場がフォーマルで重要なものになるほど、暗記と練習には十分すぎるほど完璧を期す心構えが求められる。この失敗経験から学んだ教訓はその後の多くの発表の場で生かされることになった。

¹³ 筆者は兵庫県高校生英語スピーチコンテストの審査委員長を2007年以来、毎年努めている。予選を経て本選に出場した生徒たちは、厳しい練習を通して完璧に仕上げたスピーチを発表していた。それは一寸の傷もなく磨き上げた美しく輝く宝石のようで、その段階にまで達したことは賞賛すべきことであったが、時間と空間を共有する聴衆とのコミュニケーションをさらに意識するように助言した結果、近年のコンテストでは、言葉があたかもその場で紡ぎ出されてくるような自然なデリバリーで、聴衆に語ることを楽しむようなスピーチが多くなった。兵庫県大会で優勝した生徒が近畿地区大会、全国大会でも優秀な成績を取っていることも十分に納得できる。

¹⁴ cf. *Cambridge Dictionary* (online) <https://dictionary.cambridge.org/>

¹⁵ cf. *Merriam Webster Dictionary* (online) <https://www.merriam-webster.com/>

to achieve your speech purpose, you'll probably choose the extemporaneous method.”とその期待される利点を示し、Lucas(2007:304, 2020:234)が“Most experienced speakers prefer the extemporaneous method, and most teachers emphasize it.”と述べているように、学生や社会人、職業人としてぜひ身につけたいスタイルである。

さらに上記の4つのスタイルに加え、Brody(1998:112)は extemporaneous と impromptu

の両方の概念を備えたものとして、少しの準備はできるものの実際に声に出して練習をする時間はなく半分即興のように発表するものを“expromptu”と名づけている。しかしこの expromptu という表現は広く市民権を得るに至らず、他の4つのスタイルをスピーチの代表的なものとして扱う専門書がほとんどである。

授業に視点を戻すと、例えば英語授業の場合、教師は次のようなスタイルの使い分けを自然に行っていると考えられる。

表1 授業におけるスピーチスタイルの種類

授業の場面	スピーチスタイル	スタイルの使用状況
・ 授業冒頭、挨拶、スモールトーク	extemporaneous	ある程度準備した自然な発話で授業開始
・ 教科書導入、説明	memorized, impromptu	準備して覚えた表現で説明、臨機応変に対応
・ 教科書本文音読	manuscript, memorized	練習を重ねて覚えるほどに準備した上で音読
・ 発表活動指示、助言	memorized, extemporaneous	定型の指示表現の使用、反応に合わせて対応
・ 質問対応	impromptu	予測しない質問にも対応
・ 授業終了の挨拶	extemporaneous	ある程度準備した自然な発話で授業終了

こうしたいずれの場合においても、教師が教科書や資料にかじりついて話し続けるのではなく、学習者に対してアイコンタクトをすることは重要である。その意味するところは、教師の自信や確信を伝えると同時に、学習者の反応を視覚を通してリアルタイムで捉えるためでもある。教員研修等で公開授業が行われ、教育委員会指導主事や管理職など指導的な立場にある教員が授業観察をする際に、この生徒を見てその様子を把握しながら授業が行われているか¹⁶は非常に重要な要素の一つとして評価される。

4. 自分の授業を自分で見ることによる学び

筆者は『高等教育における英語授業の研究』(2007:331)においてこの映像による授業観察の意味について論じた。また野村(2008)では、大学院英語教育学専攻で学ぶ現役の中高英語教員が

自らのスピーチ力の向上に取り組む中、授業中に行ったスピーチ発表を録画した映像を通して振り返りを行い、そこで得られた観察と気づきを生かしながら次に行った発表においてどのような変化と成長を見せたかについて論じた。

授業で何を教えるかというコンテンツの観点からは、学習者の能力や学習目標に合わせて十分吟味された教材が用意されるべきである。一方、コミュニケーションの観点からは、授業を行う教師は、論理的に分かりやすく内容を組み立て、共感的理解が得られるように工夫し、専門性や信頼感に支えられ、熱意を持って伝達することが期待される。教師の声、立居振舞い、ジェスチャーなども重要なポイントであり、聴衆に対するアイコンタクトも相手に対する関心を示すと共に、学習者の理解度をリアルタイムで知るために重要である。そうした総合的な観点から授業が効果的に行われ

¹⁶ 聴き手の反応を正しくとらえるためのアイコンタクトの重要性についてPorter & Grant(1992:102-103)は“If your eye contact is good, you will, for the most part, be able to see from the facial expressions of your audience whether they are able to follow you.”と述べている。

ているかを判断するためには、第三者的な視点から授業分析を行うことが望ましい。

教師が授業をする自分の声を聞くことや動画を見ることに対しては、Harmer(2001:293)は多くの教師が不安を覚えることを指摘している。その理由として、話し方や声、振舞いなど自分の癖をいやがおうにも認めざるを得ないからである¹⁷と述べた上で、授業を撮影し分析することの目的は「あら探し」にあるのではないとしている。この映像観察の意義について、Roman & Raphaelson(1992: 102-103)は “It’s difficult to be objective about your own speaking ability. But it can help to listen to yourself rehearse on a tape recorder. Better yet, take the traumatic step of seeing yourself on videotape. A convincing teacher.” と述べている。ここでの “convincing teacher” という言葉¹⁸にはまさに説得力がある。またHarmer(2001:293)は “(...) Having someone film you when you are teaching can be a challenging experience, but it can be extremely valuable. (...) Many teachers are alarmed at seeing themselves on video, just as many people dislike their voices on audiotape. (...) The point of watching ourselves teach is not to engage in an orgy of self-criticism, but to evaluate our actions in terms of their effectiveness. Which bits of the lesson clearly work? How could we change the way we do this exercise so that next time it is more engaging,

less confusing, more efficient?” と述べ、動画によるふり返りの意味を説いている。

このプロセスによって得られる Reflective Self は自己理解を深め、自己の考え方や思考のパターンを認知することによって、自己の行動を制御・決定していく能力と考えられ、いわゆるメタ認知能力¹⁹ともいえる。メタ認知能力が高いと効率的な問題解決を行うことができ、低いと行き当たりばったりの状態を繰り返すことになるのである。こうした観点からも他者による指摘だけではなく、自ら学ぶことの意味は大きい。

ビデオ撮影の技術的側面に関して Richards & Farrell(2005:44)は “Although there are intrinsic difficulties involved in videotaping a lesson, the result is often well worth the effort. The ready availability of a wide range of easy-to-use video cameras means that videotaping lessons is now a practical possibility in many situations.” と記して、2005年の段階でビデオ撮影が既に極めて実用的な域に達していることを述べている。現在は携帯、いわゆるスマートフォンに搭載されているレンズも高性能化し、誰でも容易に高画質の動画撮影ができるようになってきている。筆者が学生の授業映像を撮影する場合は専用のビデオカメラを三脚にセットし、音声についてはビデオカメラ内蔵のマイクではなく、専用のワイヤレスマイク送信機²⁰を発表者の近くに設置し、鮮明に音声を収録できるようにしている。それぞれの学生が行った25分

¹⁷ 『ニューズウィーク日本版』(2022年11月1日号: 27)には「録音した自分の声を聴くことは、さらけ出された自分自身に向き合うことだ。理想の自分、あるいは想定していた自分像との乖離に直面し、打ちのめされることもある。でもそれが人に聞かせている自分の声で、人にさらしている自分の姿なのだ。」とある。

¹⁸ Berkun(2009)(酒匂訳(2010:131))は元デトロイト・ピストンズ、ヘッドコーチのチャック・デイリーの「すべてを掌握する方法は一つしかない。録画でそれを見ることだ。そうした場合に限って、選手とコーチが何が悪かったのかを知ることができる。録画には偽りはなく腑に落ちる前にいくつかの視点を見せてくれることもあるのだ」という言葉を紹介し、自分がどう感じていたかの感覚と、聴衆から実際にどのように見えていたかをマッチさせることの大切さを論じている。近年、とりわけスポーツ界で審判による判定や勝敗の決定にビデオ判定が積極的に取り入れられていることから、主観的評価ではなく第三者的客観的視点によって得られる情報の意味が理解できる。

¹⁹ ミュージシャン、音楽プロデューサーであるYOSHIKI氏を取り上げたNHKの番組「プロフェッショナル「YOSHIKIスペシャル」」では「本当のYOSHIKIさんっていったどこにいますか。」という質問に対して「プロデュースしている自分がそれを演じている自分がいるのか。じゃあどの自分が本当なのか、それははっきり言って僕は分からない。今こうやってインタビューしていてもそのインタビューしているYOSHIKIをどこかで違う自分が見ていて、なんかある種プロデュースしているのかなって思ったりもしていますし。」(番組 0 h18m10s～)と発言している。ここにも自らを第三者的視点で見つめる目がある。

²⁰ 録音用のマイクは2.4GHzデジタルワイヤレス伝送、非圧縮リニアPCM伝送のSANYO HM-W300を用いている。同製品は既に生産終了となっているが、同様のデジタルワイヤレスマイクの入手は容易である。Bluetooth接続のものとしてはSONY ECM-AW4がある。いずれにしてもビデオカメラ側に外部マイク入力端子が必要となる。

の模擬授業のビデオデータはMP4形式の動画ファイルで約600MBのサイズとなる。この動画データをオンラインファイル転送サービス²¹によって学生に届けている。

5. 英語科教育法における模擬授業

ここでは教員をめざす学生が受講する教科教育法の授業の中で行う模擬授業演習を通して、学生がどのようにパブリック・スピーカーとして教壇に立つ自らの姿を意識しながらReflective Self、つまり自分を振り返る視点を身につけていくか、について論じる。

筆者が現在、担当している「英語科教育法」の授業²²では、学習指導要領の理解に加え、教科書を用いて英語教育全般について知識を得ること、英語という言語の特質や英語が用いられている世界の国々の歴史的・文化的背景を理解すること、そして教育実習に向けて、また将来、教壇に立つために必要な指導技術を身につけることをめざしている。背景的知識については『ハンドブック』²³を持たせ、学生はその中から興味関心のある話題を選び、十分な理解に基づいて他の学生の前に立って発表するという時間を設けている。この5分程度の短い時間の発表であっても、学生によっては極度に緊張し、他の学生に対するアイコンタクト²⁴ができず、声もうわずったりすることすらある。本格的に模擬授業演習に取り組む前の準備段階の活動として、さらには背景知識という引き

出しを増やすことにより、将来の授業を豊かなものにしていくための準備の意味をもたせている。

模擬授業演習は、履修学生がそれぞれ自分で教科書²⁵の課を選び、内容を研究し、授業展開を考え、指導案とワークシートを作成し、準備して授業に臨む。2022年度後期は一人25分という授業時間を設定した。学生は事前に作成した指導案とワークシートを授業実施日の遅くとも一週間前までにMy KONANの課題から担当教員である筆者に提出する。教員は細かく朱入れをしてフィードバックを返す。学生はさらにそれに基づいて修正を行い、今度はMy KONANのQ&Aを用いて再度提出するというやり取りを繰り返し、最終版を完成させる。この指導案とワークシートの修正を経た最終版は時にはVersion 5になることもある。こうした授業資料準備と並行して、学生は放課後の空き教室を使ってチョークで黒板に書きながら、実際に前に立って話すための練習とりハーサル²⁶を行って本番に臨む。

本番の授業では他の学生は生徒役として授業に参加し、25分の授業後にフィードバックコメント用紙に項目別の評価点、良かった点、改善できる点を記述する。実際に模擬授業に生徒役として参加する他の学生が記入する評価用紙の項目は次ページの図1のようなものである。実際のものはA5サイズで自由記述欄のスペースを広くしている。あえて「悪かった点」というネガティブな用語を用いず、改善につながる観点という意識をも

²¹ 筆者が用いているのは「firestorage」であるが、他にも「ギガファイル便」などもある。

²² この英語科の教科教育法の科目名称は、甲南大学では「英語科教育法」で、筆者の前任校である神戸市外国語大学では「英語教育法」であった。2004年度から2020年度までの17年間に合計448名の学生を指導した。この間も模擬授業演習は全て録画し、映像をDVDに編集して学生に渡し、学生はそれを見てふり返りレポートを書いた。

²³ 酒井志延、朝井幸次郎、小林めぐみ(編)(2017)『社会人のための英語の世界ハンドブック』大修館書店。

²⁴ アイコンタクトについて、Lloyd-Hughes(2012:12)は「話し手が聴衆とアイコンタクトをとると、聴衆は会話しているような感覚になり、参加しよう、真剣に聞こうという態度が自然に生まれます。」と述べ、NGとして「視線が床や天井を向いている」「視線がある特定の人に向かって」「視線が資料に貼りついている」の3つを示している。Zaremba(2012:195)では問題のあるアイコンタクトの一つとして“The speaker makes very rapid eye contacts that are not sustained long enough to be meaningful.”と述べ、たとえ聴衆に向いていても視線の動きが早すぎるいわゆる「キョロキョロ」も望ましくないとしている。さらにAarabi(2007:58)には“An often underutilized indicator of the status of an audience is the look on their faces. It is a good idea for lecturers to occasionally glance at the audience, take notice of what percentage look tired or are even sleeping, and to take action if needed.”と記し、聴衆の反応を捉えることも重要としている。

²⁵ 中学生用の三省堂『NEW CROWN』I、II、IIIを共通の指定教科書として用いている。

²⁶ 授業に対するリハーサルについては、Aarabi(2007:26-27)が“A lecture is a theatrical performance. Just like the best actors rehearse their scenes before going on stage, so should lecturers rehearse their talk before taking the podium.”とその重要性を述べている。

◆評価項目 (Evaluation Items) [5] を最高点、[3] を中間、[1] を最低点

1. [] 授業の最初に生徒の興味をうまくひきつけたか
2. [] 授業の説明は明確で分かりやすいか
3. [] 英語の発音は正確で聴き取りやすいか
4. [] 声の大きさは十分でよく聞こえたか
5. [] 生徒に対しアイコンタクトを意識して語りかけたか
6. [] 姿勢や動作、ジェスチャーなどは自然に感じられたか
7. [] 指導内容に十分な準備や知識、余裕が感じられたか
8. [] 授業に対する熱意が伝わってきたか
9. [] 指導案は十分に検討され、分かりやすくまとめられていたか
10. [] 指導案に示された授業の目的が達成されていたと思うか

◆自由記述 (Comment)

1. とても良かった点
2. さらに改善できると思われる点

図1 模擬授業に対する学生のフィードバック用紙

たせる表現としている。模擬授業を担当した学生は他の学生からの評価用紙をその日にすぐに持ち帰る。そのことで評価項目の得点や、良かった点とさらに改善できるとして指摘された点に分かる。また生徒の視点からの評価と、授業者の体に残っている主観的な手応えとを比較することができる。この評価表は動画を見てふり振り返りレポートを書く際の資料としても用いられる。

本番の25分の模擬授業は、図2に示すように教室の後方隅から授業全体の様子が見えるようにビデオ録画し、その動画ファイルは前述のように動画配信サービスを利用して学生に届ける。学生は他の学生から渡されたコメント用紙による評価と、ビデオカメラによる第三者的視点からの映像を

じっくり観察することを合わせて、自らの授業に対するふり振り返りレポートをまとめるのである。

6. 動画による授業観察とふり振り返り

模擬授業段階から動画によるふり振り返りに至る流れを概念図で示すと図3のようになる。授業の際に学習者からのフィードバックを受けながら教師自身がリアルタイムで行う主観的受け止めが「1」の段階である。続く「2」の段階は授業が終わり担当教員から模擬授業の内容や授業展開などについて行われる短いコメントである。ここでは改善が可能な部分へのヒントを示すが、時間の制約もあるため詳細なコメントまではできないことがある。そして「3」の段階が授業後に動画を自ら観



図2 模擬授業の様子

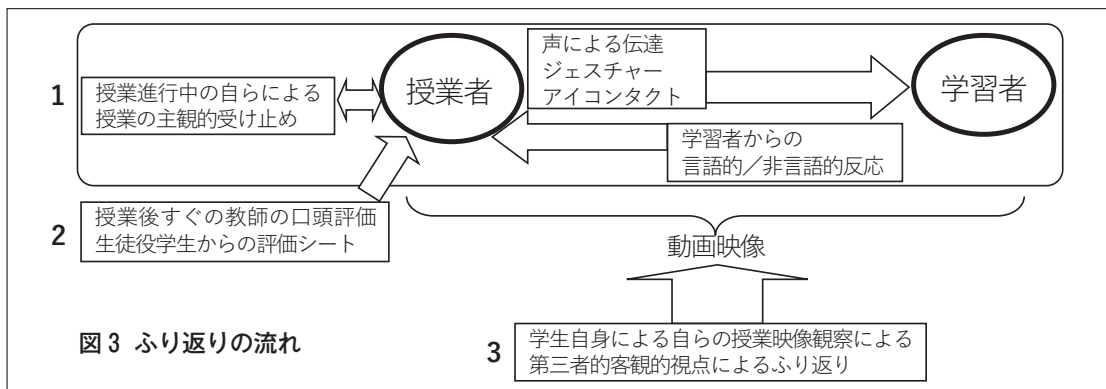


図3 振り返りの流れ

察することで得られる第三者的客観的視点による振り返りである。

学生がこうしたプロセスを経て取り組むレポートには多くの気づきがある。2021年度は9名、2022年度は11名の学生が模擬授業を行った。学生の振り返りレポートには、他学生のコメントシートに記された評価項目の集計と平均点、良かった点と改善できる点の自由記述コメントのまとめなど、

十分な情報量をもって丁寧に記載されており、学生たちが時間をかけて真摯にこの振り返りの作業に取り組んでいることが現われている。その中から特に姿勢、ジェスチャー、アイコンタクト、話し方に関する気づきの記述を表2に引用する。下線部分は筆者によるものである。

表2 模擬授業観察レポートから (2022年度後期 英語科教育法II)

1	自分自身は意識して声を出していたつもりだったが、発音や説明が合っているかという不安から声小さくなってしまっていた。そのため、堂々と自信をもって説明できるように文法の教え方や発音を改善したいと思う。(中略) 映像を見て感じたことは、先ほども述べた通り全体的に声小さいのと特に最初の英語のあいさつが気になった。映像で聞くと思った以上に声がかもっていて英語の雰囲気に変えなければならない一発目の言葉なのでもっと明るく始めないといけなかった。(中略) 姿勢は悪くはなかったが、腕まくりをするしぐさや髪の毛とマスクに触れているのが気になった。(Student H. U)
2	模擬授業映像からよくなったと思う点は3つある。(中略) ノートを書く時間の確保ができていなかったために、何人かが机に向かって何かを書いている場面でもそれを気にせず話していた。これも自分の視野の狭さと配慮が足りないことを表していると思う。次に教科書を使用するあたりから教科書を見ることが多く生徒の方を向いていない。更に、教科書をずっと持っていることで、ジェスチャーが小さくなってしまい自然さが失われてしまった。(中略) そうすれば、自然と生徒の方を向く機会が増え、ジェスチャーも大きく分かりやすいものになったであろうと思う。(Student H. I)
3	動画を見て一番注意しないといけないと感じた所は、多くの人からも指摘されたアイコンタクトです。やっぱり人前で話すことに慣れてないと身に染みて感じました。きっと様々な事で頭がいっぱいでそこまで意識する余裕が無かったのだと思います。(Student Ak. H)
4	自分では教室全体を見渡して雰囲気を把握しているつもりだったが、(中略) 自分が生徒に対してアイコンタクトを意識して話しかけられていないことに気がついた。自分自身の言葉で、もっと自然に話すことができればよかった。また、もう少し自信があれば、凛とした教師の姿になれたと思う。(Student A. T)
5	自分が思っているよりも大きめに発声して、英語の授業の楽しさを表すべきだ。声が聞こえにくい部分があった。丁寧に話していたけれど、話すスピードがもう少し速くてもよい。自信が無いことがアイコンタクトの弱さにつながっていた。自信が無い部分は、手元資料をすぐに見てしまった。(Student Az. H)
6	ビデオを見ると自分が思っていた以上にメモを見ていた。生徒の方を見ている時も全員の顔が見えるようにアイコンタクトしているのではなく、一点を見つめていることが多かった。生徒が授業を聞いているのかどうか確かめる良い機会を失っているも同然だと感じた。目標として「生徒一人一人を見る」を掲げていたが、達成度としては50%程だと感じた。自分が感じている以上に生徒を見ることができていなかったため、授業はずっと生徒の方を見ていると自分で思えるほどアイコンタクトをしなければいけないと感じた。(中略) 落ち着いた雰囲気授業を進められているものの元気が足りなかった。声は後ろまで聞こえていそうだったが、声に張りがなく私自身が楽しそうに授業をしているようには見えなかった。(Student R. K.)

7	映像を振り返って感じたことをあげるとキリがありませんが、中でも特に気になった点をいくつか自己分析します。まずは、体が動きすぎていたなと感じました。ジェスチャーの動きすぎは生徒の理解を促すこともあるのでよかったと思いますが、 <u>体の動き、特に教壇周りで前後・横に動きすぎていたように感じました。生徒の集中をそらす可能性もあるので、動く時とじっと指導する時間のメリハリをつける必要がある</u> など見て感じました。また姿勢も気になりました。休めの姿勢で音読したり、資料を見たりしていると感じました。姿勢が良いと自信があるように見えますし、ハキハキとした声も出しやすかったりとメリットが多くあるので、背筋を伸ばすことや体の動き、目の動きなど意識していこうと思います。(Student S. H.)
8	ビデオを見て、文法を説明する際に「えっと」を用いた時間稼ぎが多いように感じた。(中略)他の生徒から直接指摘は受けなかったが、 <u>目線が自分が思っていた以上に手元の紙に落ちている</u> などというものもあった。(中略)改善すべきポイントもよくわかった。発音、やりたいことを詰めすぎてしまう、口調、指示の出し方など、これから気をつけていかななくてはならないと思う。(Student M. M.)
9	動画の音声聞いてると、前に立っている自分はsを忘れて音読してしまっていますが、後に続いて音読する生徒はしっかりsがついていました。(中略)前に立っている自分の立ち振る舞いについては、 <u>歩数が多い</u> と感じました。(中略)自分の発言でも若干の焦りが見られるところ(<u>言い直しや、音読で詰まったこと、「えーと」の多用</u>)があり、実際に余裕はなかったです。(Student Y.H.)
10	動画を見ていて気になったのは自分の姿勢についてです。猫背っぽいというか、プリントを見ているからなのかうつむいて暗い感じがありました。自分では本当に気づくことができなかった部分なので、これは早急に直すべき点だと感じました。(Student R. Mo.)
11	映像を見てみると、「えー」や「うん」などの発言に迷った時の癖がかなり出てしまっていることに気がつきました。意識して直していきたいと思います。(Student R. Mi.)

上記の1や5には声の大きさについての記述が見られる。自分は十分に声を出しているつもりであったが、実際に映像からは声が小さくなっていることが分かった、声が聞こえにくい部分があったとある。9や11では「えーと」などのためらいの表現を無意識に繰り返していることを動画によって認識している。アイコンタクトについては2, 3, 4, 5, 6, 8のコメントにあるように、自分ではアイコンタクトをとって話したつもりであったが、映像を見るとそれが十分ではなかったことに気づいたというものが多。このように実際に授業を進行している間は「～できているつもり」と感じていたとしても、そうした主観的な受け止めと映像の観察を通して知った客観的な事実とのギャップが浮き彫りになっている。7や10では姿勢や動作、手の動きについても緊張や不安、余裕のなさからくる動きを学生が記述している。これらの観点も図2の「1」の段階、つまり実際に授業をしている最中に感じる主観的な受け止めと異なり、「3」の段階の映像観察を通してようやく気づく第三者的客観的視点によるふり返りのもつ意味を表すものとなっている。体の動きについてのこうした学生の気づきは大切である。誰もが自分自身の話し方、スタイル、姿勢があるために、必

ずしも一定の枠にはめなければいけないというものではないが、Zarefsky(2014:56)が“Speakers also should avoid shifting their weight from side to side, rocking on their feet. Like vocalized pauses, this nervous response calls negative attention to itself.”と述べているように、無駄な動きそのものが注目を集めてしまうことで、本来のメッセージが伝わりにくくなるのである。7の学生が、それらが生徒の集中をそらす可能性があることを明確に指摘している。実際に授業をしている段階では教える内容に集中していて気づきにくい側面でもあり、こうした映像による観察の重要性がわかる。

7. おわりに — 語りの力の獲得をめざして

映像で客観的に見る自分の姿が、自分のリアルタイムの体験の主観的感覚の中で感じていたものと異なることを自覚できること、他者からの良い評価もネガティブな評価も自ら第三者的な目で再確認できること、気づかなかった自分の癖や動作を自ら知ることなど、このプロセスを通して多くの貴重な学びがあることがわかる。これはまさにRichards & Farrell(2005:36)が“Although teachers usually feel that they have a good understanding of how

they approach their teaching and the kind of teacher they are, when given a chance to review a video recording or a transcript of a lesson, they are often surprised, and sometimes even shocked, at the gap between their subjective perceptions and “objective” reality.”とわざわざobjectiveに引用符を付けて述べていることに他ならない。このように他者からの指摘によってではなく、自ら観察し発見することを通して学ぶプロセスは、メタ認知学習方略の一種ということもできる。Brown(2000:124)においてmetacognitiveという語が“a term used in information-processing theory to indicate and “executive” function, strategies that involve planning for learning, thinking about the learning process as it is taking place, monitoring of one’s production or comprehension, and evaluating learning after an activity is completed”と説明されているように、これは学習過程について考え、観察し、評価するという認知プロセスである。外国語学習を成功に導いた人の学習過程を詳細に分析した竹内(2003)も、学習を実りあるものにするためにメタ認知プロセスに関わる学習方略がいかに大切かについて随所で指摘している。

英語科教育法の授業に参加した学生たちが、自分自身の姿をじっくり観察して現時点での自分の実像を知り、一方、パブリック・スピーカーとして教壇に立つ理想の教師像を思い描き、それに向けて変化と成長を続けていく。こうした模擬授業演習と映像観察の経験を経て獲得した教師としてのReflective Selfと語りの力が、実際に教育実習で教壇に立つ際にも、さらには将来のさまざまなパブリック・スピーチの場においても生かされることを期待している。

参考文献

- Aarabi, P. (2007). *The art of lecturing: A practical guide to successful university lectures and business presentations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 『朝日新聞』 雑論「英語で授業できるの?」(2009年2月1日).
- Berkun, S. (2009). *Confession of a public speaker*. Tokyo: O'Reilly Media, Inc. (酒匂 寛訳 (2010) 『パブリックスピーカーの告白』 東京: オライリー・ジャパン).
- Brody, M. (1998). *Speaking your way to the top: Making powerful business presentations*. Boston: Allyn and Bacon.
- Brown, H. D. (2000). *Principles of language learning and teaching* (4th ed.) New York: Addison Wesley Longman.
- Harmer, J. (2001). *The practice of English language teaching* (3rd ed.) Essex: Pearson Education.
- 橋爪大三郎 (2020). 『パワースピーチ入門』 東京: 角川新書.
- Hill, L. A. & Dobbyn, M. (1979). *A teacher training course*. London: Cassell Ltd.
- 岩見隆夫 (1981). 『演説はどこへ』 東京: 潮出版社.
- Lloyd-Hughes, S. (2011). *How to be brilliant at public speaking: Any audience, any situation*. London: Pearson Education Limited. (セーラ・ロイド・ヒューズ (2012) 『英国式スキルアップパブリック・スピーキング』 東京: ピアソン).
- Lucas, S. (2007). *The art of public speaking*. (9th ed.) New York: McGraw-Hill.
- Lucas, S. (2020). *The art of public speaking*. (13th ed.) New York: McGraw-Hill.
- Miculka, J. (1999). *Speaking for success*. Ohio: South-Western Educational Publishing.
- 文部科学省『文部科学省高等学校学習指導要領解説外国語編英語編』平成21(2009)年12月 p.73 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_9.pdf
- 『ニューズウィーク日本版』(2020年11月1日号) 特集「声の科学」CCCメディアハウス.
- 野村和宏 (2007). 「スピーチ・コミュニケーション」授業実践事例とDVD映像. 大学英語教育学会 (JACET) 授業学研究委員会編『高等教育における英語授業の研究—授業実践事例を中心に』 東京: 松柏社.
- 野村和宏 (2008). 映像を通じた自己観察による教師の気づきと成長. 『教師の成長に寄与する外国語授業研究法の開発と重層的研究データベースの構築』 玉井健、野村和宏他共著 神戸市外国語大学外国語学部. pp. 42-67.
- 野村和宏 (2022). 学生の意欲を高める対面、オンライン、ハイブリッド授業 — What, How, and Why. 甲南大学国際言語文化センター紀要『言語と文化』2022年 第26号 pp.19-38.
- 近江 誠 (1996). 『英語コミュニケーションの理論と実践—スピーチ学からの提言』 東京: 研究社出版.
- Porter, P. & Grant, M. (1992). *Communicating effectively in English: Oral communication for non-native speakers*. Heinle & Heinle Publishers.

- プロフェッショナル「YOSHIKIスペシャル」NHK総合 2022年
12月20日放送（引用 0:18:10～0:18:50）.
- Qubein, N. R. (1996). *How to be a good communicator: In person, on paper, and on the podium*. New York: John Wiley & Sons.
- Richards, J. C. & Farrell, T. S. C. (2005). *Professional development for language teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Roman, K. & Raphaelson, J. (1992). Add force to presentations and speeches in *Writing that works*. New York: Harper Perennial Books.
- 佐々木中 (2011). 「政治とは「論証」雄弁の技芸が必要」『朝日新聞』(2011年1月26日).
- 渋谷陽一 (2011). 「政治家と言葉」『朝日新聞』(2011年9月17日).
- 竹内 理 (2003). 『より良い外国語学習法を求めて』東京：松伯社.
- 吉田研作、金子朝子監修 (2011) 『現場で使える教室英語—重要表現から授業への展開まで』東京：三修社.
- 吉田研作、金子朝子監修 (2013) 『科目別 現場で使える教室英語—新しい英語科目での展開』東京：三修社.
- Zarefsky, D. (2014). *Public speaking: Strategies for success*. New Jersey: Pearson.
- Zaremba, A. J. (2012). *Speaking professionally*. (2nd ed.) New York: Routledge.